## 「Merry Forever」

二〇〇九年十一月八日午前十時三十分。赤道直下のインドネシア・バンダアチェ。
照りつける太陽のもと、津波パークのシンボルである大きな発電船の前に、百人を超える青少年赤十字の子どもたち、インドネシア赤十字をはじめとした各国赤十字、そして噂を聞きつけた多くの人々が集まっていた。
四カ月前にバンダアチェの人々と約束した、「Merry Umbrella Project」を行なうためだ。

前回訪れた際に撮影した子どもたちの笑顔を傘にプリントし、津波の被害から五年目を迎えるバンダアチェの街にプレゼントしよう！そしてその笑顔の傘をみんなで一斉に開き、平和と復興のためのメッセージを世界中に届けよう！

このコンセプトをもとにインドネシア赤十字と直接メールや国際電話でやりとりし、
「場所は津波パークの発電船の前」「たくさんの子どもたちが笑顔の傘を開く」
「ＭＥＲＲＹなメッセージを語る」などアイデアを出していった。
ただ、東京の時間に比べて、インドネシアの時間の流れ方はとてもゆっくり。

いざ仕事を一緒にしてみると、なかなか思うように進まない部分も多く、現地での限られた滞在日数の中、詳細を決めていくしかない状況でもあった。
セレモニーの内容に加えて、傘を持つ人の配置の仕方や、どうやったら美しく演出できるか、そして、傘をミスなくバンダアチェまで安全に運ぶ方法など、不安材料は山積み。
今回のプロジェクトはその全てをクリアにし、二日半で実行に移さなければならない。

現地についた次の日、ドイツ赤十字の代表がテロに遭い重傷を負った。
ここバンダアチェは津波が発生するまで激しい内紛状態で、死体が街に転がっていたという。
そこを巨大な津波が襲い、発電船の下にも今なお家の支柱や台所など人々の生活の痕跡が残る。
長い歴史の中で、常に紛争や災害に揺らぐ不安定な場所。
内心不安を抱えながらも、この場所を変えるためには、笑顔の傘を子どもたちと一緒に開き、「平和」のメッセージを訴えていくべきだとより強く思った。
文化の違いやイスラムの規律、言葉の壁などを乗り越えながら、情熱と気力で実施の日をいよいよ迎えることになったのだ。

そして迎えた当日、セレモニーのスピーチで僕は言った。

「十年間、世界中を回ってきましたが、笑顔の力、そして笑顔のコミュニケーションは本当に大切で、素晴らしい。バンダアチェでこの事を再び確信することができました。
津波で打ち上げられたこの絶望の船を、希望の船に変えましょう！
この場所を希望の場所、ＭＥＲＲＹな街にしましょう！
その思いを込めて、子どもたちの笑顔の傘をプレゼントしたいと思います。
今日、平和と幸せの願いを込めて、この笑顔の傘を一斉に開きましょう。
アチェの皆さん本当に素晴らしい笑顔をありがとう！」

青少年赤十字代表の合図で、船の二階部分の傘がブワッと花開いた。
続いて中二階、一階部分の傘がバッバッと開く。
そして地上に散りばめられた笑顔の傘が波のように花開いていく。
百本の傘に、バンダアチェの子どもたちの笑顔がいっぱいにプリントされている。
ギラギラと輝く太陽の下、笑顔の傘が津波パークいっぱいに広がった。
一瞬時が止まったかのように、僕はその光景に目を奪われた。
満開に咲く子どもたちの、笑顔、笑顔、笑顔。
笑い声が聞こえるかのように、ＭＥＲＲＹな笑顔のエネルギーが会場を覆い尽くした。

青少年赤十字の子どもたちは、
「アチェに良い教育を、アチェに永遠の平和を、アチェに緑を願っています！」とスピーチをした。
その言葉はシンプルだがとても力強い。
まるで希望の船出を祝うかのように、たくさんの人々の拍手と喝采が沸き起こる。
四ヶ月前に、この津波パークで出会ったおばあちゃんも、子どもたちと一緒に見に来てくれた。
「この津波パークで、今までこんなに嬉しい出来事はなかった。
約束を守ってくれてありがとう！アチェのみんなもとてもいい思い出になるわ！」
思えばおばあちゃんの言ってくれた一言がきっかけだったのだ。
負の遺産を抱える場所が、未来をつくる子どもたちの笑顔でいっぱいになる。
この場所で、本当に笑顔を必要とする人たちのためにできたことがとても嬉しい。
津波パークは、たくさんの人々の笑い声と弾ける笑顔で溢れていた。

セレモニーが終わって、青少年赤十字の子どもたちの笑顔の撮影会、そしてＭＥＲＲＹメッセージの取材を行なった。
「ＭＥＲＲＹは人生をカラフルに輝かせる。そして世界を笑顔でいっぱいにする」
「ＭＥＲＲＹは小さなことでも大きな意味を持っている。」

「私の家族。辛いときも嬉しいときも一緒にいれること」
「ＭＥＲＲＹは太陽みたい。ＭＥＲＲＹは私の友達です」
「あなたが『笑顔になろう！』と誘えば、世界も笑顔になる」
「幸せと希望を与えてくれた。ＭＥＲＲＹ ＰＲＯＪＥＣＴへありがとう」
微笑みながら語るメッセージは、とても力強く感動的。
津波からわずか五年しか経っていないけれど、人々はすでに前を向いて歩き始めている。
新しい世代の子どもたちも、ぐんぐんと育っている。
津波を体験した世代が、これからの新しい未来を作っていくのだろう。
街中に響くアザーン（礼拝への呼びかけ）の音色を聞きながら、僕はそんなことを考えていた。

一日五回ある礼拝の時間には、大人も子どももモスクへお祈りに行かなければならない。
アチェ語を話せない僕は、ほとんどジェスチャーで気持ちを伝えるしかない。
限られた時間や制限の中で、青少年赤十字の子どもたちと笑顔の傘を開くために、試行錯誤しながら必死に練習を重ねて平和のクリエイティブを作り上げていった。
このプロセスこそがデザインではないか。平和をイメージして人と人がコミュニケーションし、創り上げていくプロセス。ＭＥＲＲＹを通じ、彼らもこの二日間の時間の中で「本当の自分を発見した」「ＭＥＲＲＹは自分次第」などいろんな答えを見つけてくれたようだ。
ＭＥＲＲＹな気持ちになることで、周りの人に優しくできたり日々が楽しくなること。
その気持ちが伝わり、それがまたＭＥＲＲＹな空気を作っていく。
デザインとはＭＥＲＲＹな「気持ち」を作っていく行為でもある。

北京オリンピックで咲いた笑顔の傘に続いて、今日はバンダアチェで笑顔の傘が花開いた。
この笑顔を絶やさないためにも、未来の子どもたちのためにも、バンダアチェの人々自身の力で、この地の平和を守ってほしい。そんなメッセージを込めて、僕は傘をプレゼントした。
この傘が、バンダアチェの平和と復興のシンボルになればいい。
そしてこの場所が、世界の平和の象徴となって欲しいと心から願う。

この日の出来事は数多くのメディアを通して世界中を駆け巡った。
アチェ州の知事は「子どもたちのＭＥＲＲＹを、世界に発信してくれる人々がいることに、とても誇りを感じます」とセレモニーでスピーチした。
現地の人と一緒に作り上げていく、グローバルなＭＥＲＲＹ。
世界に向けて、また新たな一歩を踏み出すことができた。

九月末には同じスマトラ島で大きな地震が起きたばかり。
今回のプロジェクトを世界に発信していくことで、スマトラ島に再びスポットを当て、
インドネシアの人々に少しでも希望をもたらしてくれることを願っている。
ここバンダアチェだけではなく、地球上の負の遺産を抱える場所、
例えばイスラエルとパレスチナとの間にあるキブツで、北朝鮮と韓国の境界線、板門店で、
この笑顔の傘を満開に咲かせることが、僕の次の使命かもしれない。

ある少年からもらった「MERRY FOREVER! MERRYよ、ずっと永遠に!」という
メッセージ。この子は弟以外、一家六人を津波で亡くした。
それでも今、未来に向けて着実に歩きだし、素晴らしい笑顔を見せてくれた。
EXPOで世界中を巡った時もらった「YOU」という言葉から、さらに広がった。
世界中に「笑顔」が連鎖していき、永遠にMERRYな気持ちが伝わっていきますように。
このMERRYなデザインから、人間の持つ素晴らしいパワーに世界中が気づき、
耳を傾け、そして「本当の平和」が来ることを願っています。

MERRY FOREVER!

上:The Washington Post・REUTERS/バンダアチェの Punge Blangcut 村にある、2004年の津波で打ち上げられた船の周りに、学生達が、アチェの子どもたちの笑顔の写真の傘を持って現れた。100人以上の学生が参加したこの行事は、この地域で、170,000人の死者と行方不明者、500,000人のホームレスを出した、2004年12月26日の津波の来たる記念日の行事の一つとして、日本のMERRY PROJECTとインドネシア赤十字によって開催された。

下:ANTARA/アチェの子どもたちの笑顔:11月8日(日)、100人ほどの学生が、津波ミュージアムPLTDアプン、バンダアチェでアチェの子どもたちの笑顔の写真がプリントされた傘を開きました。このプログラムは、津波の5年目記念日に向かってMERRY PROJECTとインドネシア赤十字のバンダアチェ支社によって開催され、アチェの子どもたちは強く笑顔で平和と成長を希望していることを世界へ発信した。 (2009年・インドネシア・バンダアチェ)